

『*Absalom, Absalom!* の二人の女性： Clytie と Rosa』

太田直子

I

“The central character is Sutpen, yes. The story of a man who wanted a son and got so many that they destroyed him.”¹⁾

と、Faulkner は *Absalom, Absalom!* が Sutpen の話であると自ら語っているが、この作品は、Rosa, Quenten, Shereve, Mr. Compson, General Compson などという Sutpen 家以外の人々の分析、解釈と語りによって構成されたある種の “ratiocination story” とも考えられる。

Sutpen 家の勃興と崩壊の歴史は、Rosa がこれを語り継いでくれると信じた Quentin に対し、真実を語ろうとしたことに端をはっているが、それでは何故 Rosa は、あのように強く Sutpen 家の行く末に執着したのか。その理由については、数多くの分析や議論があるが、根本的な理由は、次の言葉に集約されているように思われる。

... and not because I was four years younger than Judith and six years younger than Henry: wasn't it to that Ellen turned before she died and said “Protect them.”?²⁾

“Protect her, at least. At least save Judith” (p. 17.)

姉の Ellen が、死を前にしてわが子達より年少の妹 Rosa に、少なくとも Judith を守ってくれ、助けてくれと頼んだ。Rosa は、“Protect her? From whom and from what?” と、幾度も姉の Ellen の頼みを繰り返し自問自答している。

両親の晩年の子供であり、最後には父にも見捨てられ遊ぶ友達もなかった孤独な Rosa にとって、姉 Ellen のいまわの際の頼みは重大で、しかも思いもかけない重荷となって Rosa の生活を左右した。それは身にあまる負担であると同時に、人からの唯一の頼まれごとであるという一種の自負心と強い責任感を Rosa に与えた。それゆえに、Rosa は終生この姉の頼みを果たすことが自分の責任であると信じ、それを実行しようと努めたのではないかと考えられる。

Absalom, Absalom! は、Sutpen 少年が、14歳の時「裏口へまわれ」と黒人の門番に「門前払い」にあったことに象徴されるように、Sutpen, Henry, Charles Bon, から Wash に至るまで、「門

口まで来て、自分の希望や行為が否定される」という悲劇的な出来事の連続であると言える。Rosa の最後の模索ともいえる結婚への望みも、「男の子が生まれたら」という Sutpen の一言によって、いわば「門前払い」の形で消え去った。さらに、Rosa のもう一つの生き甲斐であった姉 Ellen の頼みを履行しようとする願いも、Sutpen の娘、混血の Clytie によって阻止された。Clytie は、主役たちの行動の行く手に立って、主役たちの運命を決定する要因となる、いわゆる “a decisive clue”³⁾ と考えられる。

“ And when your old man told it to you, you wouldn't have known what anybody was talking about if you hadn't been out there and seen Clytie. Is that right ?” (p. 226.)

このように mulatto である Clytie の存在が、Quentin が Bon の黒い血を確信するというこの悲劇の決定的な要因を作り出したといえるが、この Clytie が、いわば、あらゆる関係で対照的な立場にある Rosa Coldfield とどのように関わり、それが、この物語にどのような意味を加えたかを考えてみたいと思う。

II

Rosa Coldfield は、決して裕福ではないが厳格な中流家庭に両親の晩年の子供（姉 Ellen とは27歳違う）として生まれた。誕生の際に母が死に、そのため Rosa は母親の生命を代償として生まれたことに対し、生涯決して父親を許すことができなかった。母が死に、姉 Ellen もすでに Sutpen のもとに嫁いでいたため、Rosa は独身の叔母に育てられる。

In a grim mausoleum air of Puritan righteousness and outraged female vindictiveness Miss Rosa's childhood was passed, that aged and ancient and timeless absence of youth which consisted of a Cassandralike listening beyond closed doors, of lurking in dim halls filled with that presbyterian effluvium of lugubrious and vindictive anticipation, while she waited for the infancy and childhood with which nature had confounded and betrayed her to overtake the disapprobation regarding any and every thing which could penetrate the walls of that house through the agency of any man. . . . (p. 49.)

母を犠牲にして生まれてきた Rosa を、悲劇的な運命の子として観察するような叔母との生活を続け、その叔母が失踪、父も死んで彼女のもとから去った時も、彼女はその生活態度、思考を変えようとはしない。彼女は、生まれたときから少女時代のあどけない時を経験することなく、43年間「ブラインドを下ろしたままの部屋」の中で生活するのである。

. . . Miss Coldfield in the eternal black which she had worn for forty-three years now,

whether for sister, father, or nothusband none knew, sitting so bolt upright in the straight hard chair that was so tall for her that her legs hung straight and rigid as if she had iron shinbones and ankles, clear of the floor with that air of impotent and static rage like children's feet, and talking in that grim haggard amazed voice until at last listening would renege and hearing-sense self-confound and the lond-dead object of her impotent yet indomitable frustration would appear. . . (p. 5.)

高すぎて足のとどかない背の高い椅子に座っている Rosa の姿は、“a crucified”⁴⁾ のイメージを想像させるものがある。締め切った部屋の中で、つまり外部からの空気の流動の遮断、さらには時代の流れさえもシャットアウトされた生活の中で、彼女は Judith の花嫁衣装を縫ったり、“whipping lace out of raveled and hoarded string and thread and sewing it onto garments” (p. 64.) と、昔からあるほつれそうな糸を編んで、それを洋服に縫い付けて毎日を過ごしている。生まれる前の出来事、そして幼少の頃の出来事を聞き記憶している Rosa は、その事実を一つ一つ紐解いて、自分の語りと自分の生活の中で何度も編み直しては身に付けている。まさしく、過去の出来事を、現実の中で自分の経験のように再認識し、それを新しいものに取り替えることなく、現在の自分の生活の中に置いていた。つまり、彼女は、過去の中に住み、現在もそして未来までもその過去を引きずっていった。このように、外界とは遮断された Rosa は、まさしく、“a king of outcast of the community”⁵⁾ な女性である。

しかし、このように過去とともに生きている Rosa も、叔母と父が去ると、経済的理由からついには隠栖の生活からでて、Sutpen 家に行くことを余儀なくされることになる。この際 Rosa は、「保護されにいく」という形を当然もっているのであるが、彼女には自分が「保護しにくい」という自負があった。過去と共に生きている Rosa にとって、姉の臨終の言葉は、身に余る負担であると同時に、唯一のそして大きな生き甲斐であったと思われる。義務感と使命感を認識した Rosa は、彼女が保護しなければならない Judith が住む Sutpen 家の中に移り住むことになる。そこには、この家を守ってゆくことが自分の義務であることを本能的に感じとっていた Clytie がいて、この二人の女性は、その主張の違いから生じる敵愾心と女性特有の意地から、お互いの摩擦度を次第に高めていくことになる。

III

Clytie は1834年、黒人奴隷と Sutpen の間に生まれた。Sutpen 自身に Clytemnestra という名前をつけてもらい、生まれてからほとんど屋敷を出ることがない。いわば、Sutpen 屋敷の付属物のように登場する。Clytie は、最初名前ではなく“the Negro girl”として第一章の結びに登場する。

'I was not there. I was not there to see the two Sutpen faces this time—once on Judith

and once on the Negro girl beside her—looking down through the square entrance to the loft' (p. 25.)

“the two Sutpen faces”の一つ、つまり“the Negro girl”が Clytie である。これは、白人 Quentin に話している白人 Rosa がもつ黒人に対する南部人特有の偏見のあらわれと見ることができると同時に、さらに“the Negro girl”という表現が、Rosa の眼に今や Sutpen 屋敷の主人であるように高圧的にせまってくるような Clytie に対する、一種の女性の嫉妬心の現れであると言える。

Rosa が最初に Clytie を紹介した場面は、Sutpen 自身も参加している negro の格闘を Judith たちが見ているところである。それは、兄の Henry がその場を逃げ出したのにもかかわらず、Judith が目をそむけずにこのシーンを凝視していることから、Judith の性格が Sutpen 譲りの激しいものであることを証明するところとして多くの批評家たちが取り上げている場面である。Judith の態度とともにここで注目したいのが、その横にいる Clytie の存在である。Judith の態度と変わらぬ様子で格闘を見つめているこの Clytieこそ、Sutpen 家の属性である激しい血統をうけついでいると言える。

Sutpen 家の血を受け継ぎ、Sutpen 屋敷の主のように住みついている Clytie は、幾度も Sutpen 屋敷から「門前払い」になるような Rosa とは全く対照的な存在であり、Rosa が決して踏み入ることのできない世界に属しているように思える。姉 Ellen の最後の頼みを果たすことが自分の義務であると信じ、Sutpen 家の中に入ろうとする Rosa にとって、Sutpen 家の門口に立ってその行く手を阻むような Clytie は“Something living in it” (p. 142.) に思われ、思わず恐怖を抱かせる目に見えない一つの厚い壁である。

Absalom, Absalom! の中で、Clytie が自分の言葉で意志を表現する場面は少ない。その主なものは四場面である。第一は、Henry が Bon を殺害した後、Rosa が Sutpen 屋敷に入ろうとしたとき、第二は、Wash が Sutpen の留守中に台所に入ろうとしたのを阻止しようとしたとき、第三は、少年時代の Quentin が Sutpen 屋敷に近づいたとき、そして第四の場面は、Rosa と Quentin が深夜、屋敷内に潜む者をつきとめようと訪れた時である。そのいずれの場面でも、Clytie が Rosa, Quentin, Wash を、サトペン屋敷の前で「門前払い」していることが注目される。

Wash と少年時代の Quentin の場面は、二人が Clytie の勢いに圧倒されて退散する場面であるが、残りの二つの場面での Rosa と Clytie の対決は、対照的な二人の女性のすさまじいまでの対決であるといえる。

'Wait,' she said. 'Dont you go up there.' Still I did not stop; . . . (p. 114.)

'Take your hand off me, nigger!'

I got none. We just stood there—I motionless in the attitude and action of running.

(p. 115.)

“... and the old nigger Clytie tried to stop you, stop her; she held your arm and said, “Dont let her go up there, young marster”...’

... the Aunt Rosa stopped... and knocked Clytie down with her fist like a man would and turned and went on up the stairs: Clytie lay there on the floor... (pp. 288–89.)

Rosa に殴り倒された Clytie を助け起こした Quentin は、彼女の様子を次のように語っている。

“... more than eighty years old and not much more than five feet tall and looking like a little bundle of clean rag.” (p. 289.)

気丈にも Rosa に立ち向かったこの老女が余りにも小さかったと気づく Quentin の言葉からも、Rosa に向かっていく彼女の勢いが感じられるが、“a little bundle of clean rags” と述べているのは興味深い。年寄りで小さい老女であるが、それだけではない Clytie の様子は *Absalom, Absalom!* の原本となる “Evangeline” の中で、Quentin と同じ役目を果たしている “I” という語り手によって、次のように描かれている。

“... she watched me, smoking. She was incredibly old: a small woman with a myriadwrinkled face in color like pale coffee and as still and cold as granite. The features were not negroid, the face in it casts was too cold, too implacable, and I thought suddenly...”⁶⁾

この中の “she” は、Raby という mulatto で、“Evangeline” の中では Sutpen の妹として登場する女性であるが、この人物が Clytie の原型であることは多くの批評家が指摘するところである。“too cold” “too implacable” というこの二つの表現こそ、気丈に立ち向かう Clytie の武器なのである。つまり、*Absalom, Absalom!* において、“you saw it not rage but terror,” “and not nigger terror” (p. 289.) と Quentin を恐れさせたように、Sutpen 屋敷の中をあばかれるのを恐れ、侵入者を阻止する番犬となって戸口に立ちはだかる Clytie の姿こそ、W. Taylor のいう “the eyes of all the Sutpens”⁷⁾ になりうるまさしく “clean rags” なのである。

IV

Sutpen の血と黒い血をもつもう一人の子供 Bon は、自分が息子であることを父に認めてほしい一心で、敢えて “incest” を犯しても Judith との結婚を考える。しかし、Sutpen は自らそれに答えることを拒否し、最後の手段として Henry に Bon が彼が half-brother であることを打ちあける。Henry は “incest” という非道徳的な罪よりも、Sutpen 家と Coldfield 家に黒い血が混ることを拒んで Bon を殺すことになる。Sutpen は、Henry が “miscegenation” を理由に

Bon を殺すであろうことを知りながら、息子に兄弟殺しの罪を負わせた。結局、間接的に息子 Bon を殺すことになる。それでは、Bon と同様の境遇にある Clytie は、Sutpen にとってどのように意識されたのであろうか。

明らかに黒い血を持っているとわかっている黒人奴隷女との間に生まれた Clytie に対し、Sutpen は、Wash の孫娘の生んだ子に対する態度とは異なり、その存在意義を認めている。

大農園主と奴隷女性の間生まれた mulatto は、南部においても珍しい存在ではない。逆に南部の白人女性の社会的な地位を守るには、黒人女の存在は不可欠であるとさえ言われていた。Ilse D. Lind の言うように、黒人女性は“commodities”⁸⁾として白人の家の中にいるわけで、その家系の継続者ではないため、Clytie が Sutpen 屋敷にいることもアメリカ南部人が最も重要視した家系の継続を左右する要因とはならない。従って、Sutpen 自身も Ellen も Henry, Judith も危機感を持つことはなかった。“Sutpen takes over the color bar”⁹⁾といわれるが、血の障害とならない黒人女性の場合は、この考えには含まれないのである。

“a word to Clytie and to Wash; master to slave, baron to retainer, ‘Well, Clytie take care of Miss Judith’” (p. 227.)

Sutpen の Clytie に対する言葉は、主人から奴隷へのものだといわれるように、明らかに Sutpen が Clytie を使用人、commodities として取り扱っていると考えられる。

Sutpen 自身、また Sutpen 家にまつわる人々が、こうして Clytie を Sutpen 屋敷の中で不可欠な存在として見ている一方で、自分を阻止し対決する Clytie を、Rosa は Sutpen 家の中でどう位置づけて考えていたのであろうか。Clytie の最初の登場場面で、Rosa は Clytie を “one of the two Sutpen faces” と呼んでいるが、五章の語りの中においても Rosa は依然として Clytie を名前で呼ぶことはしない。

“... sutpen coffee-colored face.” (p. 112.)

“... that familiar coffee-colored face body.” (p. 113.)

“Coffee-colored,” white でもなく black でもない肌の色、まさしく視覚的に見た Clytie の姿である。Clytie を目の前にした時、瞬時に印象づけられた表現は、Quentin の語りの中にも合計 8 回見られるが、その中で coffee-colored を形容している箇所はない。“Evangeline” においては、一回だけ Clytie の肌の色について次のように表現している。“in color like pale coffee,” “pale” という形容詞によって、coffee-colored という曖昧な言葉が、Clytie の miscegenation を証明する表現となっている。

Rosa は、この“色”についてのためらいをも持ち合わせていることがわかる。子供の頃 Judith と Clytie が兄弟のようにいっしょに生活しているのを見ていた Rosa は、“... I would not

even play with the same objects which she and Judith played with.” (p. 115.) と語るように、coffee-colored の Clytie が触れた物にさえ接触することを嫌っていた。その Clytie の肌と自分の肌が触れ合ったとたん、彼女は恐怖にかられ “Take your hand off me, nigger!” と叫んでしまう。ほんの一瞬の接触でさえ、Rosa には一大事件と思われたのである。しかし、Clytie と同じ家に住むことによって、Rosa の態度は少しずつ変わっていくことがわかる。

1865年、Rosa は Sutpen 屋敷に移り、Judith と Clytie の女三人で生活をはじめた。Clytie に対しての “coffee-colored” という表現は消え、彼女を Clytie と呼び、そして、 “We were three strangers” と “we” の中に Clytie もその一人として加え、 “talk, talk of a hundred things” (p. 130.) と Sutpen 屋敷の中ですごす Rosa は、暮らしを共にすることによって Clytie との心の交わりを深めていくことになる。

Clytie, not inept, anything but inept. . . free, yet incapable of freedom who had never once called herself a slave, ... (yes wild: half-untamed black, half Sutpen blood: . . .) (p. 129.)

しかし、Sutpen の屋敷を出ると、Rosa の本心にある Clytie に対する違和感は再び強くなり、あくまでも “I do not know what Clytie thought, ...” (p. 129.) と、自分と Clytie とは別世界の存在であるという意識を捨てないのである。

ここで注目されることは、姉 Ellen から後見を頼まれた姪 Judith との関連で Clytie を見るときの Rosa の意識にみられる変化である。

Judith and Clytie—Yes, Clytie was his daughter, too: Clytemnestra. (p. 50.)

No one but your grandfather and perhaps Clytie was even to know that Sutpen had gone to New Orleans too. (p. 58.)

. . . let alone Clytie to help her. (p. 71.)

She and Clytie should begin at once to fashion a wedding dress. (p. 84.)

She (Judith) and Clytie making and keeping a kitchen garden. . . (p. 103.)

. . . she and Clytie had learned to catch and harness, and gave to your grandmother. . .

(p. 105.)

Rosa は、Clytie を名前で呼び、彼女を Sutpen 家の一人として認め、そして常に “Judith (she) and Clytie” と Judith と並べて意識している。日常生活に適應できない Judith の欠落部分

を補っている Clytie の献身的な姿に、Rosa は自分の義務を代わってつとめ補ってくれる一人の女性を見ているのである。

V

1871年12月、Clytie は Bon の息子 Charles Etienne Bon を探しに New Orleans に出かけていく。生まれてこのかた Sutpen 屋敷を出ることさえなかった Clytie が、英語の話せない子供を捜しに出かけ、みごとに役目を果たして Etienne を連れ Sutpen 屋敷に戻ってきた。Sutpen 家の侵入者には「門前払い」という強い態度で接していた Clytie は、この時協力的で積極的に Etienne を受け入れる。

Etienne が最初、母と黒人女とともに父の墓参りに来たとき、Clytie は、“his expensive esoteric Fauntleroy clothing” を身につけたこの少年に対して、つけんどんな態度であるが、精一杯に彼に尽くしており、彼が黒人の男の子と遊んでいるのを見た時に、激しい剣幕で怒鳴って黒人を追い払った。さらに、孤児になった Etienne を連れに行った時、Clytie は彼に “the outgrown Fauntleroy suits” (p. 163.) を着せる。さらに Clytie は、

“... as if she were trying to wash the smooth faint tinge from his skin as you might watch a child scrubbing...” (p. 163.)

というように黒人種を洗い流すかのように彼の体を擦る。Rosa の前では始終位置付けを守り、寝るときには Bon を pure white の Judith より下に、自分よりは上に寝かせている。こうして、家の中における位置づけに気を付けて、Sutpen 屋敷内に Etienne をとどめておくことさえできれば、世の中に存在する人種問題の障害から Etienne をまもることができると Clytie は考えたのである。まさしく “guardian” “protector”¹⁰⁾ として役目を果たそうとしたのである。

同じ血を受け継ぎながら拒否され続けた Bon の生涯を見てきた Clytie は、身をもって「黒い血」の呪いと、南部におけるその社会的意義を痛感したのであった。Clytie は、いわば、彼女の生涯の最後の賭けにでた。Bon を拒否した Sutpen も死んだ今、Sutpen 家の最後の血を引く Etienne に、いわゆる男子相続、血による Sutpen 家の存続に彼女の生涯をかけたのであった。従って、Etienne が黒人女と結婚し、「黒人」としての人生を選んだときの Clytie の失望と落胆は、計り知れないものであったであろう。Etienne と Judith の死後、Clytie は廃人同様の Henry と、Etienne のわずれがたみ Jim Bond を Sutpen 屋敷にかくまっているが、それは、新旧の南部社会の象徴 (Jim Bond と Henry) をかかえて、まさに崩壊しようとしている Sutpen 家を代表しているのが Clytie であるかのように思わせる。Rosa の知らせで救急車が来ると、Clytie は、すばやく火を放って、Sutpen 屋敷と共に自らの生涯を閉じる。

VI

... color becomes the single most determining factor of your existence. Color determines where you like, how you like, and under certain circumstances, if you will live. Color determines your friends, your education, your mother's and father's job, where you play and more importantly, what you think of yourself.

In and of itself, color had no meaning. But the white world has given it meaning...

If you're white,

You're all right

If you're brown

But if you're black

Get back, get back.¹¹⁾

Brown がこう述べているように、アメリカ社会における黒人の立場は非常に無情で悲痛である。そして、“a little of Negro blood” (p. 254.) が黒人をつくり、そして、白人はそれを黒人と呼ぶのである。“mulatto,” “quadroon,” “octoroon” と黒人の血が薄くなればなるほど、自己の identity の確立は困難である。

Mulatto は “American metaphor” であるとか “to symbolize the failure of the American myth of egalitarianism.”¹²⁾ と評され、identity に苦悩する mulatto を “victim” としてとらえた小説、あくまでも「人間」として試みようとしたもの、“exotic” で “mysterious” な存在として描いたもの、ついには “black is beautiful” という視点で描かれたものから、時代背景そして作家の人種立場において、「黒人」は様々な姿をだしている。Faulkner の描いている黒人についても、彼が “as human beings” として黒人をとらえているとか、“traditional roles of Negroes in the South” の域を脱出していないなど見方も多様である。¹³⁾

中でも、*Light in August* の Joe Christmas の行動に対し、また、その彼の生き様について様々な議論がなされている。しかし、Christmas は、子供時代にも大人になっても、また何処へいても、どのような人達と交わりいかに努力しても、その苦悩は深まり、identity を確立することはできなかった。

But his blood would not be quiet, let him save it. It would not be either one or the other and let his body save itself. Because the black blood drove him first to the negro. And then the white blood drove him out of there, as it was the black blood which snatched up the pistol and the white blood which would let him fire it. And it was the white blood which sent him to the minister. . . .¹⁴⁾

このように、Joe Christmas の場合、black として行動しても行き詰まり、white としても認め

られない、いわば彼の“nonentity”がChristmasから彼のidentityを奪いとして、彼を破滅に追い込んだとFaulknerは言っている。しかし、Clytieを描くにあたってFaulknerは、いわば“nonentity”の象徴ともいえる“coffee-colored”の女性を、黒と白両者のidentityを識別する試金石の役割を果たす存在として描いている。ギリシヤ神話では、TyndareusとLedaの娘で、Agamemnonの妻に引きずられた気の弱い女として描いているが、Agamemnonなどを殺した悲劇の主演であったClythemnestraの名を、この“coffee-colored”の黒人女につけたFaulknerの意図は、どのようであったのであろうか。

Mulattoに生まれたClytieは、そのcoffee-coloredの外見で、QuentinにBonの黒い血の疑いを確信させ、物語の展開に大きな働きを示している一方で、Sutpen屋敷において、彼女特有の居場所をしっかりと持ち、そしてそれを守りとおしたことがわかる。“Coffee-coloredという黒人の血を受け継いだ明らかな証拠を姿として見せていることにより、彼女はJoe ChristmasやJim Bondのように、白人の外観と内なる黒い血の葛藤やidentityの喪失に悩む必要がない。終始、Sutpen家の一人としての自己認識を持ち、Sutpen家を守るために、侵入者を「門前払い」することが、彼女の義務であり使命であると自ら認識していた。

Pure whiteの女性Rosaが、mulattoのClytieに対して示す嫌悪の言葉と行動、一方、それに反応を示すというよりも、断乎、侵入者としてRosaを拒むClytie。やがて一時、Sutpen屋敷の中で暮らすことになり、肌で感じられる距離でClytieと暮らすRosaの彼女に対する変化、——“nigger”と叫び、Clytieの肉体に触れて一瞬のためらいを感じた時から、やがて、Sutpenの帰りを待って女三人でSutpen屋敷で過ごした日までのRosaの感情の変化——つまり、形なりにもSutpen家の中で、その人々とSutpen家の者のように過ごした間、RosaはClytieを一人の人間として、Sutpen家の一人として認めることができた。この二人の女性のように、相反する属性をもつ人間が、現代アメリカの白人と黒人の立場をも象徴しているが、彼らは、自分の主張と共存できる場合にのみ相手の存在を認識するのである。しかし、ひとたびSutpen屋敷が象徴するような実存の共通の場を離れると途端に、もとの白人優越感、黒人疎外感が抑えきれない人間となっていくのである。この二人の関係のなかに、アメリカの南部の宿命ともいえる血の葛藤、人種問題の経緯が描かれていると言えよう。

Faulknerの黒人は、“a creation of the white man”¹⁵⁾とRobert P. Warrenが言っているように、アメリカ南部特有の社会的通念に支配されたRosaによって、「黒人」Clytieは、下等な存在物をして扱われるが、彼女の方ではまたRosaを“Sutpen”家の侵入者として感じ、自ら放った火によってSutpen屋敷と運命を共にすることにより、自分の使命に殉じ、最終的にRosaを「門前払い」したと言えよう。Rosaが姉Ellenの遺言を自分なりに実行しようとし、Clytieに対する憎悪と嫉妬を強く示せば示すほどに、皮肉に、サトベンの一人として、女性として強く生きていくClytieの力が強調されるように思われる。救急車をよぶことにより、RosaはSutpenの屋敷の中に入り、いまこそEllenからの自分の使命を果たせると信じるが、一方、Clytieは火を放ってSutpen家とともにすべてを消滅することによって、自分の使命を全うしようとする。結果的には、Rosaは、彼女が保護しなければならなかったHenryを死に追いやり、

Sutpen の白人家系を断絶させ、自らの使命を果たせなくなる。Rosa は、白人としての自負のもとで自分の使命感に固執し、その使命を全うすることができなかった。一方、Clytie は、黒人として生れた運命のもとで、淡々と生き、Sutpen 家の一人としての使命を全うしたと言える。使命感という点では類似しながら、最後まで縮まらない距離に隔てられたこの二人の運命が、Sutpen をめぐる悲劇の幕引をすることになる。Rosa, Clytie というこの二人の女性の確執が *Absalom, Absalom!* の主題とは言わないまでも、それぞれの使命感を果たすために行動し、それと運命を共にしていくのを分析し、その確執や類似点を考えていくと、*Absalom, Absalom!* の悲劇は、この二人の女性、Rosa, Clytie が綴る悲劇であるといっても過言ではないとおもう。

注

- 1) Frederick L. Gwynn and J. L. Blotner, (eds.), *Faulkner in the University* (Charlottesville: The University of Virginia Press, 1959), p. 71.
- 2) William Faulkner, *Absalom, Absalom!* (Penguin Books, 1936), p. 17.
この作品からの引用及び作品への言及はすべてこの版に基づくものとし、以後、引用箇所には、括弧内に頁数だけをしめす。
- 3) Peter Brooks, "Incredulous Narration: *Absalom, Absalom!*," *William Faulkner's Absalom, Absalom!*, Harold Bloom, (ed.), (New York: Chelsea House Publishers, 1987), p. 116.
- 4) David Minter, "Family, Region, and Myth in Faulkner's Fiction." *William Faulkner's Absalom, Absalom!*, p. 81.
- 5) Donald M. Kartiganer, "Faulkner's *Absalom, Absalom!*: The Discovery of Values" *American Literature* XXXVII (1965), p. 297.
- 6) William Faulkner, "Evangeline," *Uncollected Stories of William Faulkner*, Joseph Blotner, (ed.), (New York: Random House, 1979), pp. 594–95.
- 7) Walter Taylor, *Faulkner's Search for a South* (Chicago: University of Illinois Press, 1983), p. 101.
- 8) Ilse Duso Lind, "The Design and Meaning of *Absalom, Absalom!*," *William Faulkner: Three Decades of Criticism*, F. J. Hoffman & O. W. Vickery, (eds.), (Michigan State University Press, 1960), p. 303.
- 9) Peter Brooks, "Incredulous Narration; *Absalom, Absalom!*," p. 188.
- 10) Thadious M. Davis, *Faulkner's "Negro": Art and the Southern Context* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1983), p. 202.
- 11) H. Rap Brown, *Die, Nigger, Die!* (New York: Dial Press, 1969), p. 2.
- 12) Judith R. Berzon, *Neither White Nor Black: The Mulatto Character in American Fiction* (New York: New York University Press, 1978), p. 52.
- 13) cf. Steven E. Agbaw, *Black-White Doubling in the Fiction of William Faulkner*, (The University of Connecticut, 1986), pp. 14–5.
- 14) William Faulkner, *Light in August* (New York: Vintage Books, 1932), pp. 424–25.
- 15) Robert Penn Warren, "Faulkner: The South, the Negro, and Time," *Faulkner: A Collection of Critical Essays*, (New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1966), p. 259.